



子ども医療特有の難しさに対応すべく、
各所にハード、ソフト両面への創意光る。
殊に療育環境の演出と庭の効果は出色だ

*

奥に見えるのが本館（新館）であり、完全に分離されている



this month Architecture

特定医療法人 群馬会

群馬病院 児童思春期病棟・外来棟 ばらの咲く庭

精神科、それも児童思春期の子ども達に対する医療行為の場となると、まさに、多様な要件が突きつけられるのは想像に難くないところだが、今回の例を見ると長年の同医療への経験は極めて有用であると分かる。すべての要素がバランスよく絡み合う様は、心地よいばかりである。

選者／考察者 岩堀幸司（建築家）

写真／川澄・小林研二写真事務所 *印は病院または設計者提供

昭和

昭和37年3月に医療法人群馬会が設立され、翌年開設された110床の精神科病院が同院の嚆矢となる。以後地域の医療需要に応えるべく増床を重ね、昭和60年には465床という極めて大規模な精神科専門病院に成長し北関東地域での精神医療において高いプレゼンスを誇ってきた。なお、大病院でありながら、きめ細やかな精神科医療を提供していることでも広く知られる。

今回は、昨春竣工した同院の「児童思春期病棟・外来棟 ばらの咲く庭」の完成を機に、その建築ならびに「療養環境」の根幹にもなっている「ガーデン」について紹介する。

「庭」にして単なる「庭」に非ず

同院のメイン機能となる新館については、実は2011年2月に第1期工事として完成した新館を本連載第10回で紹介している。当時の記事のメイン見出しは「患者に時間を取り戻し、略々精神科医療の流れを確実に受け止めたひとつの解」として紹介した。その後、同院はその文意どおりに発展したが、久しぶりに訪問して大きな印象を覚えたのは「庭」である。新館にも見事なイングリッドシユガーデンが仕立てられているが、こちらも見事である。基本コンセプトは「生活に寄り添うローズガーデン」であるという。前庭（西側）はばらの庭園「ウェルカムガーデン」



北西側からの外観。中世西ヨーロッパのロマネスク建築をイメージしたというが、重くなく、軽くもないのいい



エントランス前のピロティ。十分な奥行を取った修道院の回廊のような、内外をつなぐ半屋外空間としている



1階のエントランスホール。明るく、かつオープンで、木質感も自然である。玄関の開口部が大きいのが分かる

ン」、北側は桜のシンボルタワーを配した小さな丘状の「子どもの遊びゾーン」、東側には「癒しのゾーン」、「ふれあいゾーン」など、植栽を違えて変化を持たしているが、建築家の視点からも、まさに建築と庭との関係性が生み出す可能性に改めて気づかされたと言ってもよいだろう。確かに時節柄はらが咲き誇る中になると、時間を取り戻せるような気がしたと言っても大げさではない。

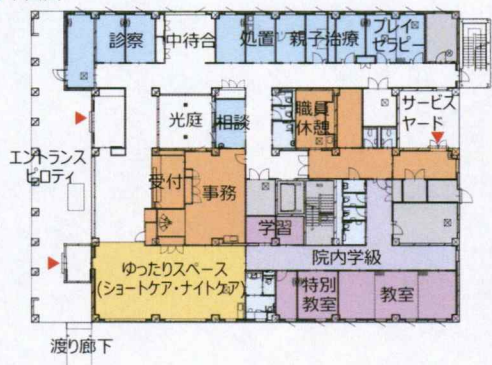
なお、この庭の世話は、造園総合アドバイザーと植木職、担当スタッフ、テンポラリーを含め15人が丹精込めて世話している。その成果としての切り花で院内を飾り、時期を迎えた果樹は児童を含め患者も喜んで収穫するという。この庭が地域にも開かれているというのも嬉しい。

精神科医療への独自のアプローチ

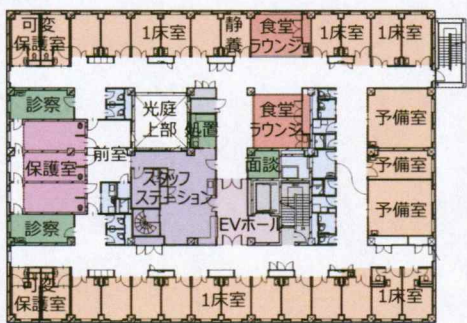
今回紹介する児童思春期病棟・外来棟は、設計コンセプトとしては精神科病院の基本として、安全・清潔・堅牢・静粛性を担保した上で、子どもたちの施設である一方で、特徴的な考え方を反映させている。

1つ目は、児童思春

1F 平面図



2F 平面図



配置図



1階の中待合。低層建物ならではの外光や通風を利用して室内でも自然を感じられるようにしたという



1階診察室。医師に向かい合うと、背の向こうに庭が見える。家具、什器等も落ち着いた色調にしている



1階の親子治療室。この施設ならではの部屋であろう。他の例に漏れず、什器等は木質感に溢れ、かつ明るい

期とはいえ患者は中学生が中心であるという事実から、その心理に配慮した「かわいい」デザインよりも「大人として」の「落ち着きある」デザインを採用していることである。

2つ目は、子ども医療特有の「療育」という要件を満たすために、①「治療」、②「養育（生活・成長）」、③「教育」の実践に対してソフト・ハード両面での充実化に取り組んでいることだ。以下に、その具体的取り組みを解説する。

- 治療・外来診察におけるアットホームな親子治療・活動療法に加え、シヨートケア、ナイトケアなどへの取り組みを実施できる設備と設え。
 - 養育・病棟は全て個室にし、かつ低床ベッドなど個々の患者にあわせられた療養環境の実現。
 - 教育・1階に教室・学習室を設け、2階病室から階段を使って「通学」するという演出の実現。
- いずれも、本院の医療理念が外装・内装の設計・デザインに生かされた結果である。

甘くなく、さわやかでもなく

病院の環境づくりで最優先すべきは、臨床における「治療」であることはもちろんだが、精神科においては、やさしくリラクセスできる、「生活環境」の創出も演出も極めて大きいと言える。その点で、同院の演出は素晴らしい。



専任スタッフが丹精こめて育てている植栽。施設の名称どおりばらが主人公である

*

まず、外観がいい。中世西ヨーロッパのロマネスク建築を模して組積造風に壁に縦長のポツ窓が穿たれ、飾らないスマートな表情だ。前述のとおり、子どもにもおねづいていないことに好印象を抱く。回廊風の列柱からばらの庭園がエントランス前の空間へ繋げるイメージで、深みを増したたたずまいとなっている。

大人らしい、落ち着いたデザインは内部にも及ぶ。まず、木質化である。窓の額縁・腰壁手すり・ルーバー・サインなど細部にわたり木質材を採用している。次いで、床・壁・天井等の木質部・タイルなどのグレイトを基調としたカラーリング。さらに、1階中待合・事務室、2階病棟のスタップステーション・廊下に外光と風通しをもたらす吹き抜け、光庭、



中庭ともいえる光庭。外来待合は芝生広場と光庭両方に面し、開放感に溢れる

*

高天井他、開放感を演出するさまざまな造りには感心する。まさに、「療育環境」というフレーズが素直に理解できるのがいい。

※

群馬病院の理念には、「私たちが使って下さい。プロフェッショナルな援助を心こめて提供します。そして、あー訪れてよかったと感じていただける病院を目指します」とある。まさにこの理念を読むと、彩り豊かなガーデン群に囲まれた「療育」の空間要素を容易に理解できる。施主と設計・施工者の意識が見事に昇華した例といえるのではないだろうか。特に子どもの精神医療への貢献という視点から、筆者は感心する。ばらは咲き、志しも咲いたのである。



北側の子ども遊びゾーン。敢えて起伏を設け、庭に表情をつけている

*

特定医療法人 群馬会 群馬病院 児童思春期病棟・外来棟 ばらの咲く庭

病床数：全461床（今回紹介の病棟は24床・全室個室）
将来最大38床、保護室2室・可変保護室4室

【建築概要】

敷地面積：27,869.11㎡
 建築面積：1,272.95㎡（全体：9,717.44㎡）
 延床面積：2,277.57㎡（全体：24,448.13㎡）
 構造階数：RC造 地上2階
 工期：2022年1月～2023年1月
 設計：KAJIMA DESIGN
 監理：鹿島建設関東支店品質監理一級建築士事務所
 施工：鹿島建設